

た。この歌の下旬、小生にはよく分からないが、駅も日常とは全くちがう雰囲気という意味らしい。

一枚の真白き羽根の漂へり早苗の影がゆらめく水に

松本秀一

田植えをしてほどない田に、なぜか浮いている白い羽根。羽根の白さが、早苗田の水の美しさをきわだたせている。都会人が忘れてしまった水の美しさ。

東京はスモツグの中見えざれば見ぬもの清し山より
戻る 峰尾碧

東京のあたりは立ちのぼるスモツグでぼうつと霞んでいる、そんな映像を思い浮かべていいだろう。「見ないもの」とは何か。「社会」とか「未来」といったものか。

雷のたびに起きてはまた眠る生徒のをりて夏は来に
けり 大津貴寛

教室の歌らしいが、なんともユーモラスな味わいがうれしい。こっくりこっくりしていたのが、一瞬びくっと目覚めてまた居眠り。教師は気づいていながら、とくに注意したりはしないのである。結句のとぼけた味わいなんとも、いい。

鳥海山の黄菅をのぼり牛の背の和毛梳きゆく岬の潮
風 加賀谷実

海に近い鳥海山ならではの風景。名詞を多くし、また、スケール大きく表現して、特色を出している。

内側からひかり発しているように麦は夕日を受けて
輝く 濱田千春

ひさしぶりに麦畑の歌を読んだ気がする。「内側からひかり発しているように」は、麦秋の時期の麦畑を表現して的確。

ペランダに出されし隣の子の泣けり我この部屋に住
み馴れたるや 藤島秀憲

マンション形式の隣家とペランダがつづいている家。一戸建てに住んでいた人にはなじみのない隣人との距離感である。この作には、おそらくそうした背景を読んでいるのだろうと思う。新居のとらえ方が斬新である。なお、「出されし」は「出された」「出されたる」「出されて」などだろう。

父の言いいし〇四艇（四艇）は「震洋」なりき五分の一の雛
形に触る 前川多美江

長崎県川棚町の特攻殉国の碑の資料館での作。震洋は、日本海軍の特攻兵器。一人乗りのペニヤ板製小型モーターボートで、敵艦に体当たりして自爆攻撃したのだという。この作では、「〇四艇」という戦時中の呼び名が重要。父の思い出、昭和十年代という時代と密接にむすびついているからである。

千鳥千鳥泣いてはおらぬ島人の魂一切れ分けてもら
いぬ 中西由起子

「千鳥千鳥」は奄美の島唄らしい。「ちぢゅりゃちぢゅりゃ」という発音が、泣いているように聞こえるが泣いてはいない、そんな意味を読む。